様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　７ 月 １１ 日現在

機関番号：３２５０４
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｈ００９２９

研究課題名（和文）現代日本社会における呪術的意識と行為をめぐる秩序化のダイナミズムの解明

研究課題名（英文）Ordering Dynamism in Consciousness and Action toward Magic in Contemporary Japanese Society

研究代表者
荒川　敏彦（ARAKAWA, Toshihiko）

千葉商科大学・商経学部・教授

研究者番号：７０５３４２５４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　11,900,000円

研究成果の概要（和文）：ともに東京都23区民を対象とした2006年の調査と2020年の調査から以下を指摘できる。1.男性より女性、高齢者より若者の方が呪術に親和的である。2.神棚の保有が仏壇の保有より親呪術的な傾向は変わらない。3.墓参りは現世利益的な祈願の場として伝統化している。4.呪術の効果意識は呪術効果と心理効果に二分される。5.占いが若者と女性に親和的な傾向は変わらない。6.お守りは効果意識よりバチ意識の方が強い。14年間でお守り廃棄への抵抗感は薄れた。7.呪術的な伝統的習俗への意識が強いほど地域活動への参加率が高く、グローバル化が進展する日本の地域コミュニティの担い手は伝統的・保守的な住民といえる。

研究成果の学術的意義や社会的意義
呪術的な事柄は、世界と個人との関わりの中にある。神棚の保有や仏壇の保有は単なる保有ではなく、その違いには世界に対する構えがあり、人びとは神棚や仏壇の保有と結びついた呪術的諸要素との関係性を生きているのだ。それはジェンダーの構造を維持したり変容させたりする下地をなしている。また呪術意識と政治意識との関連の根底に、現代日本社会の地域コミュニティを担っているのは、呪術親和的な保守的中高年層であるという事態がある。呪術的要素の積極的肯定の多さとそれを全否定する人の少なさから、諸個人が呪術的なものと結びつきながら、本人の意図しない社会的領域でその意識と行動が方向づけられている様相が見えてくる。

研究成果の概要（英文）：The following can be noted from the 2006 and 2020 surveys, both of which were conducted among residents of Tokyo's 23 wards. (1) Women's awareness to magical things (instrumental religiosity) are more poplar than men, and young people are more magical than elderly people. (2) The attitude of owning a kamidana is more magical than owning a butsudan (Buddhist altar). (3) Visiting graves is inherited as a place to pray for worldly benefits. (4) There is no change in the tendency for people's awareness of the effects of magic to be divided into magical and psychological effects. (5) Fortunetelling remains popular among young people and women. (6) The resistance to the disposal of amulets has diminished over the past 14 years. (7) The stronger the awareness of traditional practices, the higher the rate of participation in community activities, indicating that although globalization is progressing in Japan, traditional and conservative residents are the leaders of the local community.

研究分野：宗教社会学

キーワード：呪術意識　ジェンダー　伝統　習俗　コミュニティ　占い　神棚　お守り

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

本研究は、初詣、墓参り、地鎮祭、お守りの所持、合格祈願、占いなどの、日常の中で半ば習俗と化した「呪術的なもの」が、社会のいかなる秩序化と結合し、人間関係や地域社会や国家についてのいかなる意識と関係しているのかを考察するものである。

本研究は、私たち生活意識研究会が 2006 年に行った呪術意識調査を背景とし、2020 年に追加の調査を行って、呪術意識を醸成するメディア上の言説の布置連関も分析することで、何気なく実践されている呪術的なものが、状況に応じてその意味を変容させながら、伝統や地域社会や国家と関わるアイデンティティーの形成といかに結合し、人々の意識や行為がいかなる仕方で秩序化されていくのか、そのダイナミズムを解明するものである。

ところで「呪術」と称されるものは、旧来の近代社会像からは排除すべきものとみなされてきたカテゴリーであるが、生活の現実においては、人々の日常における不安やリスクに対処する手段の一つであり、実践の中で人々の社会意識形成の際にくり返し作用する重要なファクターと考えられる。

従来、近代社会では宗教的なものが衰退するという世俗化の認識が、多方面で暗黙の前提とされてきた。しかも、西洋キリスト教文化を背景にした、合理／非合理、文明／未開といった二分法は、呪術を「他者」とみなし、自らはそれを乗り越えたとする自文化優越的なアイデンティティーの形成に寄与してきた。マックス・ヴェーバーにおける脱呪術化の概念が「呪術からの解放」と訳され受容されてきたことは、そのような問題含みの認識を象徴している。近代社会は呪術的なものから解放される「べき」だとされたのである。

しかし、そこで「他者」とされた呪術的なものは、現代の社会意識の基盤を構成する重要な要素である。「呪術」的なものは「科学」的合理性をもたず、教義や教団組織をもつものとしての「宗教」とも異なる、不定形ではあるが生活の不安や欲求に密着したものであり、時代に応じて意味や形態を変容させながら、人々の社会意識の基盤を構成していると考えられる。

近年では、ポスト世俗化論や公共宗教論が主張され従来の世俗化論は説得力を失い、バウマンの液状化理論、ベックのリスク社会論や「第二の近代」論など、近代社会の根本的な変容も指摘されている。社会の転換期に生きる現代人の不安は、一方で目の前の安定志向を生み、他方で劇的な変化を期待するカリスマ待望論を生みだすだろう。

そこで本研究では、「呪術的なもの」という視点から、不安定で見通しのきかない現代社会において、人々が何を手がかりにその時々の態度を決定するのか、また日常のリスクにどう対処しようとしているのかを明らかにしようとした。占いを含めた呪術的なものは、未知の出来事、予見不可能な事柄、科学では対処しきれない事柄に対応する一つの手段でもある。交通安全のお守りや厄払い等は、人びとにとって生活の中のリスクに対応する一つの形式でもあるのである。人々の欲求や不安のあり方は、しばしば寺社やパワースポット等が取りあげられる観光や伝統文化に関するメディア情報とも関連しているだろう。呪術的なものがどのような言説と関連づけられているかのデータに基づいた実証分析は、リスク社会とされる現代の重要な課題であると考えられる。

以上のような思想史的背景を踏まえ、呪術を「何らかの目的のために超自然的なものの助けを借りて、その現象をおこさせようとする行為や信念体系」と広義に定義して、現代日本社会における呪術への意識と行為の実態を解明しようとしたものである。

２．研究の目的

その中心にあるのは、以下の３つの問いである。

第一に、人々は呪術についてどのような意識をもち、行為しているのかという問いである。初詣、節分、仏壇や神棚の存否、墓参の経験、お守りの所持、占いの意識や実践、地鎮祭への意識、家相を気にするか、霊魂観といった、呪術意識に関する量的データに基づくデータが極めて少ないのが現状である。従来の社会調査や宗教意識調査から、呪術についての意識や態度に関する十分なデータを収集することは困難である。まずは、その実態を調査することが出発点となる。

第二に、特定の属性と特定の呪術との間にはいかなる親和関係があるかという問いである。私たち生活意識研究会は、2006 年 1 月に東京都 23 区民 1,200 人を対象に質問紙調査を実施した。その調査結果は、竹内郁郎・宇都宮京子編『呪術意識と現代社会――東京都二十三区民調査の社会学的分析』（青弓社）として刊行され、社会学、宗教学、人類学の諸研究、さらにはラジオ番組等でも取りあげられ広く社会的関心を得た。この調査では、男性よりも女性の方が、また高齢層より若年層の方が、さらに生活満足度の低い人より高い人の方が、仏壇所持者より神棚所持者の方が、いずれも呪術に親和的であることが確認できた。しかし標本サイズが小さく（有効票 724、回収率 60%）、社会的属性と呪術の親和傾向についてのより詳細な分析が求められていた。そこで今回は標本サイズを増やし、ふたたび東京都 23 区民を対象として、前回調査から 14 年後の意識や行動の実態とその変容を、比較を交えて解明することが大きな狙いである。

第三に、生活の中の呪術的な意識や行為が、社会のどのような秩序化に組み込まれているのかという問いである。新聞や雑誌における神社、パワースポット、占い等の情報の掲載は、社会的

ニーズの反映であると同時に、読者の関心に一定の方向づけを与えている。メディア上で、仏教的、神道的、民間信仰的など多様な形で秩序化の力がせめぎ合う象徴闘争（ブルデュー）が展開されていると見ることができるだろう。その闘争を内在させた「呪術的なもの」の実践を通して、地域や伝統や国家などと自己とが関連づけられ、アイデンティティーが再構成されていると考えられる。では、その実践と再構成を基礎づける要素として、どのようなものがあるのか。その秩序化の力学を考察することを課題の一つとしている。

以上の三つの問いを通して、人びとの日常における呪術に関わる意識や行為が、言説空間との関連の中で、どのようなアイデンティティーの形成に作用しているのかを分析することが、本研究の課題であった。

３．研究の方法

本調査を実施するに当たっては、2020 年に東京都 23 区民に対して生活意識調査を実施し、その量的データを基に考察を行った。この調査は、生活意識研究会が 2006 年１月に東京都 23 区民を対象に行った生活意識調査（MGC2）との比較を念頭に置いている。そのため今回 2020 年の調査（MGC3）を設計するに当たり、2006 年の調査と調査対象（調査時期、対象地域、対象年齢）を同一にし、質問項目もできるだけ同一のものを立てるなど、相互の比較が可能なよう出来る限りの工夫を施した。

調査方法については、2006 年の調査は調査員による訪問留め置き法で実施したが、今回は郵送による配布と回収としたことが重要な変更点である。実査に当たっては、複数の調査会社に見積もりを依頼して検討した結果、サーベイ・リサーチセンターに委託した。２つの調査の調査概要は以下の通りである。

〈MGC2〉
調査対象集団：東京都 23 区在住の 20 歳から 79 歳までの住民男女
標本抽出：二段無作為抽出法
標本数：1,200 サンプル（有効回収票 724 票，回収率 60.3%）
実査方法：調査員による訪問留め置き法
調査期間：2006 年（平成 18 年）1 月 13 日から同年 1 月 22 日までの 10 日間

〈MGC3〉
調査対象集団：東京都 23 区在住の 20 歳から 79 歳までの住民男女
標本抽出：層化二段無作為抽出法
標本数：5,100 サンプル（有効回収票 1,701 票，回収率 33.4%）
実査方法：郵送配布・郵送回収
調査期間：2020 年（令和 2 年）1 月 17 日から同年 1 月 31 日までの 15 日間

今回（2020）の調査の大きな特徴として、新型コロナウィルス感染症（covid-19）の日本国内で感染拡大を見るまさに直前に調査票の回収を終えた点を明記しておく。調査終了後まもなく瞬く間に感染は全国に広がり、世界中を巻き込んだパンデミックとなった。日本政府は初めて緊急事態宣言を発出し、人びとの生活様式は大きな転換を迫られた。その後も感染は拡大と停滞を繰り返し、終わりの見えない状況が続いてきたが、2023 年に入り、変異し続ける新型コロナウィルスを抱えながら社会生活をかつての状態に近いものへと戻そうとする動きが始まっている。したがって、奇しくも今回の調査は新型コロナウィルス禍による生活スタイル転換直前の社会意識に関するデータを提供するものとなった。

４．研究成果

研究成果として、『研究成果報告書』における以下の諸論文の知見をあげることができる。

（１）「神棚・仏壇の保有状況と呪術的諸要素との関係性――神棚的秩序と仏壇的秩序」（北條英勝）では、仏壇や神棚を保有することと呪術的諸傾向との関係について考察している。神棚の保有が親呪術的傾向を示し、仏壇の保有は呪術的な傾向を強めるようには作用しない。この傾向は、意味づけの点でも見られた。神棚を保有している方が仏壇を保有している場合よりも、より呪術的な意味づけを行なっている。こうした点から第２章では、仏壇と神棚の保有状況の違いによって、世界に対する構え方が異なっているという実態が析出されている。仏壇を保有する人は、「神棚のみ」を保有する人よりも信仰・信心との結びつきが明確であるのに対し、「神棚のみ」保有する人は、信仰・信心との結びつきが少ないが多くの呪術的要素との関連が見られた。執筆者の北條は「家に『仏壇があること』や『神棚があること』は、それらを単に物理的に保有しているだけのものではなく、そこに暮らす人びとが仏壇や神棚と結びついた呪術的諸要素との関係性を生きているのである」と結論づけている。

（２）「墓参りにおける現世利益の祈り――周期的な祈願の経験とその蓄積」（荒川敏彦）では、墓参りが現世利益的な祈願の機会となっていることに注目している。墓参は伝統として浸透し、７割を超える人びとが墓前で祈願している。自然の霊や守護霊、神や仏の観念は先祖の霊と同一

ではないが、MGC3 ではそれらの存在可能性を肯定する人ほど、墓参に際して祈願する傾向が見られた。また、未来について楽観的な人よりも悲観的な人ほど墓前祈願をするという傾向も見られ、墓前でなされる現世利益の願いは、「信仰」とは無関係に、不安の解消やリスク回避を願う定期的な機会になっている。支持政党との関連も興味深い。自民党の支持層が男女とももっとも墓前祈願をする傾向が強い一方で、公明党の支持層のうち、とくに女性支持者は墓前祈願をしない傾向が顕著に見られたのである（支持母体である創価学会の墓参り不要論に影響されたと考えられる）。墓参りに対する信仰上の要素を除外するなら、墓前での祈願は個人的なものでありながら、共同性において形成された「伝統」的行為として、周期的に反復され、安定して継承されているといえるだろう。

（３）「祈願効果意識の２類型――〈呪術効果〉意識と〈心理効果〉意識に関する 2006 年と 2020 年の比較」（荒川敏彦）では、祈願することについての意見について考察している。MGC2 と MGC3 とで祈願意識の割合内訳が 14 年間でほとんど変わらなかったという「変化のなさ」が特徴的である。すなわち、「願い事をすればかなうことがあるので意味がある」と考える〈呪術効果〉意識と「願い事をしてもかなうはずはないが、心が安らぐなら意味はある」と考える〈心理効果〉意識に大きく二分される――〈心理効果〉意識が５割強、〈呪術効果〉意識が３割弱という――分布構造が強固に見られたのである。別の面から言えば、心理主義化も進行せず、〈呪術効果〉意識の頑健さも確認された。また、信仰をもっている人は〈呪術効果〉意識をもつ割合が高く（５割強）、信仰をもたない人になるとその割合は３割ほどに一気に低下する傾向も変わらなかった。その一方で、特徴的な変化も抽出できる。そのひとつは、女性が各年代ともほぼ同様の〈呪術効果〉意識を示すようになった点である（MGC2 では女性は年代が上がるにつれて〈呪術効果〉意識は漸減していたが MGC3 では均一化した）。また世代ごとの変化を見ると、男性の 30 代から 40 代にかけて、および 60 代から 70 代にかけての世代において、〈呪術効果〉意識の高まりが見られた。「変わらない」データのなかにある変容を抽出しながら、第４章では最後に、政治意識との関連として、公明党支持層がもっとも親呪術的で、共産党支持層がもっとも非呪術的である傾向を取り出している。

（４）「占いについての調査結果の前回調査との比較――占いに接するメディアの変化」（下村育世）では、以下の知見を析出している。第一に、占いへの親和性が若年層に強く表れるという「変わらない」傾向である。逆に年代が上がるにつれ、占いへの関心と実践は減衰する。第二に、女性に占いへの親和性が強く表れるという傾向も、MGC2 と MGC3 とで共通していることが確認された。そして第三に、14 年間の変化として、とくに若年層において、占いに接触するメディアに顕著な変化があったことが指摘されている。たしかにデータとしては、若年層における新聞雑誌の占い記事の閲覧比率の大幅な減少、テレビの占いの視聴比率の相対的な低減が見られる。しかし、それは占いへの関心が減ったことを必ずしも意味しないだろう。若年層においては、新聞・雑誌やテレビなど従来の媒体ではなく、インターネットの視聴が急激に増えたからである。それに伴い、若年層の占いに接触する行動様式に変化が生じたのだろうと、下村は指摘している。

（５）「お守りについての〈効果意識〉と〈バチ意識〉――あなたはお守りを捨てられますか？」（荒川敏彦）では、お守りについて大きく二つの側面からアプローチしている。お守りを目的達成の手段としてその効果についての「効果意識」と、合格祈願や病気平癒といったお守りの効能それ自体ではなく、お守りを捨てるという行為に抵抗を感じる「バチ意識」の二つである。指摘は多岐にわたるが、第一に、効果意識よりもバチ意識の方が肯定される割合が大きいこと、第二に、MGC2 から MGC3 の比較でお守りを捨てることへの抵抗感は薄れたことが大きな特徴といえる。第三に、効果意識とバチ意識とではバチ意識がより「強く」作用すると考えられる一方で、相対的には弱いながらも多くの呪術項目と連関が見られたのは効果意識の方である。効果意識とバチ意識にかんする諸項目の布置連関から、①超人知的現象の存在可能性、②占い関連の諸項目、③呪術的行為の効果意識（パワースポットに行く、絵馬を奉納する、お経やお祈り、お祓い）が、それぞれ系をなして配置されていることが観察できた。

（６）「日常生活の中に見る呪術的傾向の行方――東京都 23 区調査から見えるもの」（宇都宮京子）では、MGC2 と MGC3 の結果を広範囲にわたって比較検討している。MGC2 と MGC3 で共通するのはジェンダーの側面であり、男性よりも女性の方が呪術的傾向が顕著に見られた。年代では、60 歳代、70 歳代は呪術的事柄を肯定する割合が最下位であることが多く、特に 70 歳代で顕著であった。逆にいえば、若者の方が呪術に親和的であるとういことである。また人生の未来についてどう考えているかの意見に対する回答傾向から、宇都宮は「呪術的傾向の行為や意識は、必ずしも回答者の生活が、現在、リスクが多かったり、不安であったりすることと必ずしも関連しているのではなく、人知を超えたルールや存在を前提しつつ、未来に向けて幸せを願うという人生態度と関係している可能性は否定できない」と指摘している。また男性の方に、若干ではあるが MGC2 より MGC3 で呪術的傾向が強くなっている傾向が見られる点について、その変化の担い手が主に男性であり、女性においてはむしろ一部でわずかながらも呪術的傾向の低下が見られることを指摘している。宇都宮は「もしもこの傾向が続くならば、いつかは、男性と女性の呪術的な傾向の回答割合の差は、より縮小していくかもしれない」と述べている。

（７）「地域参加と宗教・呪術的な意識と行為――都市地域コミュニティの担い手の実態」（高橋典史）では、MGC3 ではじめて採用した質問項目である「地域活動への参加」と「地域の伝統行事」に注目している。この二つの質問のあいだに大きな差異は見られないが、「初詣へ行った」「墓参した」「地鎮祭に呪術的な意味づけをする」「忌み日の忌避の意識が強い」「神仏といった

超人知現象をありえると思う」といった傾向が強いほど、地域コミュニティの諸活動への参加率が高くなる傾向がある。高橋は、「伝統的な習俗・慣習を実践していたり、呪術的な性格を有する伝統的習俗への意識が強かったりするほど、地域の諸活動への参加率が高い傾向にあることは、現代日本の都市住民の地域参加への動機・関心と伝統的な宗教文化とのあいだの関連性を示唆しているだろう」と述べている。また、「世間の習慣やしきたりに従うことを是とする」「将来に関して楽観的である」「生活満足度が高い」「最近１年間に選挙に投票した」人ほど、地域コミュニティの諸活動への参加率は高くなる傾向があることから、「生活に余裕があり、保守的で政治参加への意識の高い住民たちが、都市の地域コミュニティの諸活動に参加している状況」を析出した。最終的に高橋は、「東京 23 区部という大都市の地域コミュニティの諸活動が、伝統的な習俗や慣習を重視し、宗教・呪術的な事がらとの親和性が高い、保守的な中高年層によって担われているという実態がある。現代の日本社会はグローバル化や多様化が急速に進展しているが、個々の地域コミュニティは伝統的・保守的な住民によって支えられている」ことに論及している。

（８）自らの存在の置き所はどこにあるのか。それは、日常の細々としたなかに潜む意識や実践の積み重ねとして、知らず知らずのうちに据えられているのではないか。そこに、制度的・教団的な宗教や信仰から「浮遊する」個人が、同時に歴史的社会的に共同体内部で培われてきた呪術的世界像のなかに「埋め込まれた」個人でもあるという、逆説的な姿が見えるように思われる。

個人は、埋め込まれつつ浮遊するという逆説的事態のなかにありながら、しばしば資本主義的制度に組み込まれながら社会のなかに散在している呪術的諸要素を、あるときは自らの現世利益のための手段として、またあるときは自己の不安を解消するための手段として、またあるときは自己のパワーを得るために、したたかに「活用する」個人でもあるだろう。

確固とした社会システムや教団的宗教性から浮遊する個人と、自ら意図しないまま呪術的世界像とつながった地域社会や文化に埋め込まれている個人と、そして祈願を（しばしば短期的な）目的達成手段として活用し成功をたぐり寄せようとするしたたかな個人（切実な個人）とは、同一である。本研究は、日常生活のなかで呪術的なものと触れる機会が醸成する一局面に限定して、それら多層に織りなされた網の「目」としての諸個人が、宗教的な面から社会秩序を維持し変容させるダイナミズムを捉えようとする試みである。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計27件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　7件）

１．著者名 荒川敏彦	４．巻 59
２．論文標題 墓参における伝統の創造と現世利益――東京都23区民の生活意識調査から	５．発行年 2022年
３．雑誌名 千葉商大紀要	６．最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 TAKAHASHI, Norihito	４．巻 -
２．論文標題 Minorities	５．発行年 2021年
３．雑誌名 The Bloomsbury Handbook of Japanese Religions	６．最初と最後の頁 157-163
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 下村育世	４．巻 5
２．論文標題 近代日本における暦の『開化』と『復古』――神宮による頒暦制度の成立	５．発行年 2021年
３．雑誌名 新陰陽道叢書	６．最初と最後の頁 263-297
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 荒川敏彦	４．巻 58(3)
２．論文標題 不変のなかの緊張 ： 2006年と2020年の東京都23区民「生活意識」調査の比較から	５．発行年 2021年
３．雑誌名 千葉商大紀要	６．最初と最後の頁 1～14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 宇都宮京子	4．巻 58(1)
2．論文標題 価値自由の意味と可能性	5．発行年 2020年
3．雑誌名 東洋大学社会学部紀要	6．最初と最後の頁 5～17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 下村育世	4．巻 228
2．論文標題 明治改暦におけるグレゴリオ暦をめぐる問題――日本らしい暦とは何か	5．発行年 2021年
3．雑誌名 国立歴史民俗博物館研究報告	6．最初と最後の頁 501～517
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 宇都宮京子	4．巻 本冊
2．論文標題 ヴェーバー「理解社会学」の基礎構造	5．発行年 2020年
3．雑誌名 行為論からみる社会学	6．最初と最後の頁 31～48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 高橋典史	4．巻 上巻
2．論文標題 越境する移民のもたらす宗教変動――日本におけるカトリック教会に注目して	5．発行年 2020年
3．雑誌名 宗教史学論叢 25 越境する宗教史	6．最初と最後の頁 69～92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 荒川敏彦	4．巻 本冊
2．論文標題 調査の背景と目的	5．発行年 2021年
3．雑誌名 現代日本社会における呪術的意識と行為をめぐる秩序化のダイナミズムの解明――2020年1月東京都23区民調査・中間報告	6．最初と最後の頁 3～9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 北條英勝	4．巻 本冊
2．論文標題 調査結果（単純集計）	5．発行年 2021年
3．雑誌名 現代日本社会における呪術的意識と行為をめぐる秩序化のダイナミズムの解明――2020年1月東京都23区民調査・中間報告	6．最初と最後の頁 13～35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Takahashi, Norihito	4．巻 57(2)
2．論文標題 Japanese Religions in Contemporary Europe: Social Roles of Cultural Activities	5．発行年 2020年
3．雑誌名 東洋大学社会学部紀要	6．最初と最後の頁 21-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 下村育世	4．巻 62(1)
2．論文標題 昭和戦中期の暦――暦と大麻の頒布強制と頒暦数の急伸	5．発行年 2019年
3．雑誌名 高崎経済大学論集	6．最初と最後の頁 74－104
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 下村育世	4．巻 18
2．論文標題 伊勢神宮からの官暦の頒布――戦前における大量の暦の流通を支えた制度と実態	5．発行年 2019年
3．雑誌名 暦文協NEWS	6．最初と最後の頁 1-5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 下村育世	4．巻 別冊93号
2．論文標題 明治改暦再考	5．発行年 2020年
3．雑誌名 宗教研究	6．最初と最後の頁 53-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 高橋典史・高山秀嗣・武井順介	4．巻 -
2．論文標題 日本の伝統仏教の海外展開の現状と課題	5．発行年 2019年
3．雑誌名 海外における日本宗教の展開――21 世紀の状況を中心に	6．最初と最後の頁 24-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 下村育世	4．巻 92
2．論文標題 近代における編暦と頒暦	5．発行年 2019年
3．雑誌名 宗教研究	6．最初と最後の頁 143-144
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 荒川敏彦	4．巻 -
2．論文標題 社会をつくりだす呪術への態度――浮遊する個人、埋め込まれる個人、活用する個人	5．発行年 2023年
3．雑誌名 現代日本社会における呪術的意識と行為をめぐる 秩序化のダイナミズムの解明 ――２つの「東京都23区民生活意識調査」の比較	6．最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 北條英勝	4．巻 -
2．論文標題 神棚・仏壇の保有状況と呪術的諸要素との関係性――神棚的秩序と仏壇的秩序のゆくえ	5．発行年 2023年
3．雑誌名 現代日本社会における呪術的意識と行為をめぐる 秩序化のダイナミズムの解明 ――２つの「東京都23区民生活意識調査」の比較	6．最初と最後の頁 31-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 荒川敏彦	4．巻 -
2．論文標題 墓参りにおける現世利益の祈り――周期的な祈願の経験とその蓄積	5．発行年 2023年
3．雑誌名 現代日本社会における呪術的意識と行為をめぐる 秩序化のダイナミズムの解明 ――２つの「東京都23区民生活意識調査」の比較	6．最初と最後の頁 57-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 荒川敏彦	4．巻 -
2．論文標題 祈願効果意識の２類型――〈呪術効果〉意識と〈心理効果〉意識に関する2006年と2020年の比較	5．発行年 2023年
3．雑誌名 現代日本社会における呪術的意識と行為をめぐる 秩序化のダイナミズムの解明 ――２つの「東京都23区民生活意識調査」の比較	6．最初と最後の頁 73-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 下村育世	４．巻 -
２．論文標題 占いについての調査結果の前回調査との比較――占いに接するメディアの変化	５．発行年 2023年
３．雑誌名 現代日本社会における呪術的意識と行為をめぐる 秩序化のダイナミズムの解明　――２つの「東京都23区民生活意識調査」の比較	６．最初と最後の頁 87-103
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 荒川敏彦	４．巻 -
２．論文標題 お守りについての〈効果意識〉と〈バチ意識〉――あなたはお守りを捨てられますか？	５．発行年 2023年
３．雑誌名 現代日本社会における呪術的意識と行為をめぐる 秩序化のダイナミズムの解明　――２つの「東京都23区民生活意識調査」の比較	６．最初と最後の頁 104-125
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 宇都宮京子	４．巻 -
２．論文標題 日常生活の中に見る呪術的傾向の行方――東京都23区調査から見えるもの	５．発行年 2023年
３．雑誌名 現代日本社会における呪術的意識と行為をめぐる 秩序化のダイナミズムの解明　――２つの「東京都23区民生活意識調査」の比較	６．最初と最後の頁 126-162
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 高橋典史	４．巻 -
２．論文標題 地域参加と宗教・呪術的な意識と行為――都市地域コミュニティの担い手の実態	５．発行年 2023年
３．雑誌名 現代日本社会における呪術的意識と行為をめぐる 秩序化のダイナミズムの解明　――２つの「東京都23区民生活意識調査」の比較	６．最初と最後の頁 163-188
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 下村育世	4．巻 240
2．論文標題 奈良弘暦者・吉川家の近代 ――陰陽師の身分喪失と暦師の家業継続	5．発行年 2023年
3．雑誌名 国立歴史民俗博物館研究報告	6．最初と最後の頁 35 - 53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 高橋典史	4．巻 -
2．論文標題 コロナ禍の日本における宗教を基盤とする移民支援の展開	5．発行年 2023年
3．雑誌名 現代宗教2023	6．最初と最後の頁 33-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 高橋典史	4．巻 226
2．論文標題 本に暮らす台湾仏教徒たちの素食（菜食）の文化	5．発行年 2023年
3．雑誌名 Mネット	6．最初と最後の頁 32-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計13件（うち招待講演　5件／うち国際学会　3件）

1．発表者名 TAKAHASHI, Norihito
2．発表標題 Migrant Workers And Religious Facilities Under The COVID-19 Pandemic In Japan
3．学会等名 International Society for the Sociology of Religion 36th Conference（国際学会）
4．発表年 2021年

１．発表者名 下村育世
２．発表標題 近代の官暦と神社の例祭日
３．学会等名 日本宗教学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 北條英勝
２．発表標題 『世界の悲惨』における「社会-分析の臨床的機能」再考
３．学会等名 関東社会学会（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 高橋典史
２．発表標題 在日ベトナム人と宗教
３．学会等名 国際開発学会（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Toshihiko, Arakawa
２．発表標題 Soziallehren's development and the "Troeltsch and Weber" problem revisited
３．学会等名 F・W・グラーフ教授特別講演会「トレルチのSoziallehrenの現代的意義」（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Norihito Takahashi
２．発表標題 Multicultural Coexistence and Religion in Contemporary Japan (6): Support Activities for Technical Intern Trainees and Refugees by FBOs
３．学会等名 The 2nd Annual Conference of the East Asian Society for the Scientific Study of Religion
４．発表年 2019年

１．発表者名 下村育世
２．発表標題 伊勢神宮からの官暦の頒布――戦前における大量の暦の流通を支えた制度と実態
３．学会等名 暦文教ミニフォーラム（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 下村育世
２．発表標題 明治改暦再考
３．学会等名 日本宗教学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Norihito Takahashi
２．発表標題 From Refugees to Supporters: Conversions Made by Religious Organizations in Contemporary Japan
３．学会等名 XIX ISA World Congress of Sociology RC22 Sociology of Religion（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 下村育世
２．発表標題 近代における編暦と頒暦
３．学会等名 日本宗教学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 下村育世
２．発表標題 奈良弘暦者・吉川家の近代――暦と神宮大麻との関わりに注目して
３．学会等名 日本宗教学会
４．発表年 2022年

１．発表者名 下村育世
２．発表標題 近代の暦における暦面掲載事項――神道との関係をさぐる
３．学会等名 神道宗教学会研究例会（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 高橋典史
２．発表標題 宗教とグローバル化・移民
３．学会等名 「宗教と社会」学会
４．発表年 2023年

〔図書〕　計5件

1．著者名 荒川敏彦	4．発行年 2020年
2．出版社 現代書館	5．総ページ数 238
3．書名 「働く喜び」の喪失――ヴェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』を読み直す	

1．著者名 高橋典史	4．発行年 2019年
2．出版社 弘文堂	5．総ページ数 568
3．書名 『国家神道と国体論――宗教とナショナリズムの学際的研究』（内「昭和戦前期の仏教界と海外日系二世――見学団、日本留学、修学団に注目して」）	

1．著者名 高橋典史	4．発行年 2020年
2．出版社 現代史料出版	5．総ページ数 568
3．書名 『変容する「二世」の越境性――1940年代日米布伯の日系人と教育』（内「1940年代ハワイの神道系新宗教の越境性――天理教と金光教を事例に」）	

1．著者名 高橋典史・白波瀬達也・星野壮	4．発行年 2018年
2．出版社 明石書店	5．総ページ数 240
3．書名 現代日本の宗教と多文化共生	

１．著者名 下村育世	４．発行年 2023年
２．出版社 ぺりかん社	５．総ページ数 328
３．書名 明治改暦のゆくえーー近代日本における暦と神道	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	宇都宮　京子 (Utsunomiya Kyoko) (90266990)	東洋大学・人間科学総合研究所・客員研究員 (32663)	
研究分担者	北條　英勝 (Hojyo Hidekatsu) (20308042)	武蔵野大学・人間科学部・教授 (32680)	
研究分担者	高橋　典史 (Takahashi Norihito) (50633517)	東洋大学・社会学部・教授 (32663)	
研究分担者	下村　育世 (Shimomura Ikuyo) (00723173)	一橋大学・大学院社会学研究科・特任講師（ジュニアフェロー） (12613)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関